私の思い出写真館

映画「ベアテの贈りもの」の製作

岩田 喜美枝
資生堂 取締役執行役員副社長

落合良さんの自宅にて2004年12月撮影。
右から筆者、赤松良子さん、藤原智子さん

人生にとって大切なことが3つある。「キャリアを作る」「家族を作る」、そして「社会と関わる」ことであると私は考えている。「社会と関わる」活動の一つとして、ドキュメンタリー映画の製作と上映運動に5年間関わっている。その映画は、GHQで日本国憲法の男女平等条項の起草に関わったベアテ・シロタさん（世界的ピアニストであったレオ・シロタの娘）のファミリー・ヒストリーから始まる。そして、この憲法を土台にして築き上げられた戦後60年の間の女性史を映像で描いたものである。

この映画の製作・上映に関わった中心人物が5人の女性であった。映画製作委員会の代表である赤松良子さん、彼女は私が大変敬愛している労働省での上司であり、細川内閣では文部大臣を務めた人である。副代表は落合良さん、彼女はソニーで女性の管理職の第1号になった人であり、ベアテさんとの連絡調整を一手に引き受けてくれた。そして私は、道を拓いてくれた前の世代の苦労を次の世代の女性たちに引き継ぎたいとの思いで、事務局長として寄付金集めや地方での上映運動の先頭に立った。監督は藤原智子さんにお願いした。彼女は、芸術文化の分野を中心に素晴らしいドキュメンタリー作品を撮っているが、女性問題は初めてで、実に多くの資料を読み込んで下さった。掲載の写真は2004年、映画完成後に落合さんのお宅で夕食を4人でご一緒した時のものである。

右から落合良さん、赤松良子さん、藤原智子さん

映画完成後は、全国の自治体や大学などで200回以上の自主上映会が持たれ、現在は、欧米を中心に海外での上映が続いている。この上映運動のきっかけは岩波ホールでの5週間の上映であり、岩波ホール支配人の高野悦子さん抜きにはこの映画は語れない。

私以外の4人の女性は全員70歳代であり、とにかく元気。私にとっては10年後、15年後の可能性を示して下さる人生の先輩たちである。